

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：30102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00502

研究課題名（和文）ソヴィエトの非公式文学・亡命文学における狂気の言説

研究課題名（英文）MadnessTheme in Soviet Unofficial Literature and Emigrant Russian Literature

研究代表者

岩本 和久（Iwamoto, Kazuhisa）

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：40289715

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ソ連の精神医療の歴史、シニャフスキーにおける狂気の主題、タルコフスキーの映画に見られる狂気の主題について分析を行い、以下の点を明らかにした。ソ連の精神医学は社会主義リアリズム文学のモデルに従い診断を行っていた、シニャフスキーの裁判では社会主義リアリズムとロシア・フォルマリズムの文学観の違いが論点となっていた、タルコフスキーの映画に見られる狂気は中世的な神秘的な力と結びついている。ソ連後期の芸術において、狂気は公式文化やイデオロギーからの逸脱として機能していたと言えるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究期間内には研究資料の購入と国外における調査を行なった。それによりソヴィエトの非公式文学や映画と社会の関わりについて、改めて検証を行うことができた。研究成果は狂気の主題と社会的イデオロギーの関係を問うものだが、芸術と近代社会の関係を考察する本研究はソヴィエトという特殊な体制を理解するために役立つものではなく、広く近代芸術一般について考える際にも応用できるものである。

研究成果の概要（英文）：In this study soviet psychiatry and madness theme in Soviet unofficial literature and films were analyzed, and following points were illustrated. (1) Socialist Realism Literature influenced on soviet psychiatry; (2) Socialist Realism ideology became apparent in Sinyavsky trial; (3) Insane characters in Tarkovsky's films have medieval images and demonic power. Madness in Soviet unofficial culture counteract official ideology of Soviet regime.

研究分野：ロシア文学

キーワード：ロシア ソヴィエト 非公式 文学 映画 狂気 シニャフスキー タルコフスキー

1. 研究開始当初の背景

ソヴィエト体制下において、精神医学は人民の自由を奪い、弾圧するための手段として用いられた。ソ連では自由な文学活動も許されておらず、社会主義リアリズムの名のもとで、型通りの典型的なストーリーを語る事が求められた。

一方で、公式の文学とは別の形、いわゆる「非公式文学」として作品を執筆、発表する作家たちもいた(タミズダートと呼ばれるソ連国外での出版や、サミズダートと呼ばれる地下出版がこれにあたる)。それらの作品においてはしばしば「狂気」がテーマとされたが、これまでの文学研究においては、それは反体制活動の一環として考えられてきた。不自由なソ連体制に対する抵抗の形として、不合理な狂気が描かれたと考えられたのである。世界的に有名なディストピア小説であるザミヤーチン『われら』は、そのような実践の先駆けとみなすことができる。

とはいえ、狂気が理性の反対側にあるのは、社会主義体制とは異なる体制においても同じである。フーコーが『狂気の歴史』において問題としたのは、まさにそのような近代社会からの狂気の疎外であった。

ソ連が解体され、ソ連体制が過去のものとなった現代において、ソ連体制期における狂気の表現について再検討することは、反体制活動の枠にはとどまらない意味を見出すことにも、また反体制文学を新たに意味づけることにもつながるだろう。本研究はこのような問題意識の中で計画されたものである。

2. 研究の目的

シニャフスキーやプロツキーらソ連の非公式作家の作品を分析し、ソ連文学における「狂気」の諸相を明らかにする。また、ソ連の精神医学の歴史や実態について、ソ連解体後の新しい資料を用いて明らかにする。

それらの作業を通して、ソ連作家たちが真に抵抗していたものが何であったのかを(ソ連体制だったのか、近代社会だったのか)明らかにする。

本研究はそれらを目的として計画された。

3. 研究の方法

本研究は日本におけるシニャフスキー研究の第一人者である中野幸男と、亡命文学の研究者である宮川絹代、研究代表者である岩本和久(ソ連文学、ポスト・ソ連文学を研究対象とする)の3名のチームで行われた。

研究の方法としては当初、日本国内やロシアの図書館を利用した文献調査、ロシアにおける文献購入を予定していたが、ロシア軍によるウクライナ侵攻の結果、ロシアにおける調査が困難となり、研究計画を大幅に変更することとなった。

具体的には、研究対象を文学から映画にまで拡大し、新たに映画監督アンドレイ・タルコフスキーの作品における狂気の表象を検討することにした。アンドレイ・タルコフスキーはドストエフスキーや詩人アルセニー・タルコフスキーなど、ロシア文学の伝統の上に映画を製作しており、自身も小説を執筆している。アンドレイ・タルコフスキーはそのように文学世界の境界に位置しているだけでなく、東洋思想やカスターナダなどソ連後期に流行した神秘思想からも影響を受けており、ソ連後期における非合理的な思想を代表する知識人と言える。その思想や作品を理解することは、ソ連後期の思潮を明らかにしようとする本研究にとって重要な意味を持つと考えられた。

タルコフスキーについての調査としては最新の研究資料を購入した他、後期作品『ノスタルジア』が撮影、製作されたイタリアにおいて現地調査を行った。

4. 研究成果

本研究の成果としては、(1)ソ連の精神医学の特質、(2)シニャフスキー文学における狂気の評価、(3)タルコフスキーの作品における狂気の意味、の3つを挙げることができる。

(1)ソ連の精神医学の特質

ソ連における精神医学を天田城介は「精神医学化」(18世紀末から19世紀初頭)、「脱精神医学化」(1930年代~1940年代)、「再精神医学化」(戦後~1960年代)の3段階で整理している。

の段階で活躍したスネジネフスキーを中心とするモスクワ派の精神医学の診療は、文学との共通点が多く、社会主義リアリズムにも依拠していた。医師たちは文学作品のプロットの中に共産主義の未来を読み取るのと同じやり方で、患者の中に兆候を読み取るようとした。

(2) シニャフスキー文学における「狂気」

シニャフスキーの考える文学や狂気は、ソ連国家の考えるそれらとは異なっていた。このズレが顕在化したのが、シニャフスキー裁判である。

シニャフスキー裁判においては、語り手と作者を同一視してはならないという主張が、ヴァチェスラフ・イワーノフによってなされた。一方、裁判所は芸術と人生を一体化させており、語り手の声をシニャフスキーに帰そうとした。

ソ連国家は、レーニンの反映論にもとづいてシニャフスキーの創作を批判した。反映論は反射学とも結びついており、さらには社会主義リアリズムにも浸透していた。ところが、ロシア・フォルマリズムの理論にもとづくシニャフスキーの創作観は登場人物と作者を分離するものであり、ソ連の公式の人間観、文学観とは異なっていた。

ソ連国家が社会主義リアリズムの理論によってシニャフスキーを断罪しようとした一方、シニャフスキーはロシア・フォルマリズムの理論によって、それに対抗しようとした。そこでは狂気をめぐる評価が事実上、文学論争に転化してしまっていたのである。

(3) タルコフスキーの映画の中の狂気

タルコフスキーの映画に初めて狂気の主題が現れるのは、2作目の長編である『アンドレイ・ルブリョフ』においてである。中世ロシアを舞台としたこの作品には、精神に異常をきたした女性が繰り返し登場する。その一人は異教の夏祭「イワン・クパーラの夜」に裸体でアンドレイ・ルブリョフを誘惑する女性だ。エピソードの最後に川に入るこの女には、魔女や水の精ルサルカのイメージを見ることができる。

もう一人の狂女は教会にやってくる聖愚者だ。タタール襲来の際に強姦されそうになった彼女を救うため、アンドレイは殺人を犯すが、最終的に彼女はタタール人の情婦になってしまう。

中世ロシアで狂人は魔女や聖愚者とみなされたが、タルコフスキーのこれらのイメージもまた、それら伝統的なイメージを踏まえたものだ。

記憶の中のトラウマが実体化するという物語を『惑星ソラリス』で語ったタルコフスキーだが、これは無意識に抑圧されたイメージが回帰するという精神分析的な寓話にも思える。『鏡』もまたトラウマ的な記憶の回帰を映像化したものとみなすことができるだろう。

続く『ストーカー』、『ノスタルジア』、『サクリファイス』はいずれも、狂人が世界を救うという物語である。『ストーカー』では怪しげな案内人が、「望みを叶える部屋」に人々を案内する。『ノスタルジア』は狂気に取りつかれた男が、世界の救済を訴えて焼身自殺する。『サクリファイス』では世界を救おうとした主人公が魔女と結ばれる。

これらの作品をたどると、外部の不気味な力だった狂気が内在化される過程、世界を救う肯定的な力として把握されるようになる過程を見出すことになるだろう。『アンドレイ・ルブリョフ』、『惑星ソラリス』、『ストーカー』では狂人（魔女、聖愚者、宇宙ステーションの「客」、ストーカー）が人々から拒まれるが、『ノスタルジア』や『サクリファイス』では狂人と主人公の間に絆が生まれる。

『ノスタルジア』はイタリアを旅するロシア人を描いているが、そこで追憶の対象となるのは祖国のロシアだけではない。中世のイタリア社会もまた、追憶の対象となっているのだ。廃墟となった教会が『ノスタルジア』には繰り返し登場するが、それは古い美の世界が崩壊してしまったことを示している（廃墟をめぐる旅という設定は、ロッセリーニ監督の映画『イタリア旅行』へのオマージュと考えられる）。またドストエフスキーがイタリア滞在中に執筆した『白痴』の中の有名なフレーズ「美は世界を救う」を、想起することもできるだろう。

『ノスタルジア』のロケがなされた古い建築物は、今も残されている。それらはトスカナ地方からローマに至る間に点在している。映画のラストシーンで主人公がロウソクを持って渡るプール、そして意識を失った主人公の夢であるかのように提示される廃墟の教会は、いずれもトスカナ州にある（バーニョ・ヴィニョーニ、サン・ガルガーノ修道院）。

温泉のイメージと重なるように提示されるのが、水没した教会だ。これはローマから100キロほど離れたサン・ヴィットリーノにあるサンタ・マリア教会である。17世紀に建設されたものの、18世紀に床下から地下室が湧き出し、地盤も沈下してしまった。教会の中から外にかけて川が流れ出しているような形になっている。

タルコフスキーにとってのイタリアはこうした廃墟の世界であり、そしてまた狂信者のいる反近代的な世界でもあった。タルコフスキーの狂気は上述したように中世的な神秘的な力と結びついたものだが、『ノスタルジア』の廃墟のイメージもまた反近代の志向にふさわしい。

シニャフスキーの場合もタルコフスキーの場合も、狂気は公式文化からの逸脱であった。一方で、どちらのケースにおいても、狂気こそが真の文化への入り口となっていることがわかる。狂気は政治的抵抗であるが、それよりも文化的抵抗であったと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kinuyo Miyagawa	4. 巻 55
2. 論文標題 The Existential but ' in the Translations of I.A. Bunin 's The Gentleman from San Francisco into English and Japanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Biblioteca di studi slavistici	6. 最初と最後の頁 83-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本和久	4. 巻 100(39)
2. 論文標題 大口ロシア主義で思想一致 露大統領とノーベル賞作家	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 エコノミスト	6. 最初と最後の頁 80-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野幸男	4. 巻 19
2. 論文標題 アンドレイ・シニャフスキーと「狂気」の言説 ロシアにおける精神医学と刑罰	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 GR 同志社大学グローバル地域文化学会紀要	6. 最初と最後の頁 35-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 21(4)
2. 論文標題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Art Logos	6. 最初と最後の頁 122-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 4
2. 論文標題 " " " " " "	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 200-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本 和久	4. 巻 52
2. 論文標題 ガリーナ・ドットキナ著・荒井雅子訳『夜明けか黄昏か』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア語ロシア文学研究	6. 最初と最後の頁 136 ~ 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32278/yaar.52.0_136	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮川絹代	4. 巻 1
2. 論文標題 " " "	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 173 ~ 179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Kinuyo Miyagawa
2. 発表標題
3. 学会等名 IV " " " (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩本和久
2. 発表標題 タルコフスキーの映画における「無防備な身体」
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名
2. 発表標題 " - "
3. 学会等名 . (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩本和久、鴻野わか菜、越野剛、高柳聡子、松下隆志	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋書店新社	5. 総ページ数 384
3. 書名 現代ロシア文学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	中野 幸男 (Nakano Yukio) (40640800)	同志社大学・グローバル地域文化学部・助教 (34310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	宮川 絹代 (Miyagawa Kinuyo) (40757366)	東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関